

一 桔梗、羅縵に  
 二 菊、羅縵に  
 三 愛らしき義也  
 四 イる  
 五 是より以下諸  
 通せず、他本を  
 見合ふべし  
 六 左將也  
 七 梓の事にや

菊の所々うつろひたる。刈薺。龍膽は、枝ざしなどもむつかしげなれど、こと花昔霜枯れはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。わざととり立てて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。雁の來る花と、文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。壺薺。薺。同じやうの物ぞかし、老いていけばおしなどうし。しもつけの花。夕顔は朝顔に似て、いひ續けたるもをかしかりぬべき花の姿にて、にくき實の有様こそ、いと口をしけれ。などてさはた生ひ出でけむ。あかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど猶、夕顔といふ名ばかりはをかし。

○なでしこ、からのぼさら也——唐撫子、和羅麥とてあり。

○をみなへし——女郎花文集、女倍之新撰薺集。

○菊の所々うつろひたる——古今集秋下。平貞文、「秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば。」

○りんどう——龍膽也、古今の物名に、「花ふみちらす烏うたむ」とよめり。

其後の悦目抄に、「りんどうの花を手向くるき法師の經よむこそはたふとかりけり」と俳諧歌によめり。

○かまつかの花——すなはち此の草紙に、雁の來る花と書くよしいへり。世に

一 イニもえしも  
 二 此の草花の中  
 に、薄を香きく  
 はへぬこの事也  
 三 さはごおもし  
 るきものなりし  
 也也  
 四 穂のたけたる  
 時節也  
 五 薄の穂の白髪  
 に似たれ也也  
 六 萩子(タチヤ  
 カ)文選西京賦  
 にあり

雁來紅といふ物にや。

○かにひの花——古今の物名にあり、雁緋也、よのつねのがんひは、藤にも似ず春秋にもさかず。但異本に、かるひの花とあり、是は雁緋にはあらで、別の物にや。

○しもつけのはな——花うす紫にて、こでまりに似たり。拾遺の物名に、「植ゑてみる君だにしらぬ花なれば我しもつけむ事のあやしき」とよめる物也。

○にくきみのありさま——夕顔の實は瓢也。なりひさごといふ物なり。

○なでさきはたおひ出でけむ——いかでかさやうには、又生ひ出でし事ぞと也。葦の花、更に見どころなけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらむと思ふに、ただならず。もしも薄には劣らねど、水のつらにて、をかしうこそあらめと覺ゆ。「これに薄を入れぬ、いとあやし」と人云ふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧に濡れて、うち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見所なき。色々に亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたる後、冬の末まで、頭いと白く、おほどれたるを知らで、昔思ひ出て顔に靡きて、かひろぎ立てる、人にこそ、いみじう似ためれ。よそふる事ありて、それをしもこそ、あはれとも思ふべけれ。萩はいと色深く、枝たをやかに咲きたるか。朝露に濡れて、なよくとひろごり伏したる。さを鹿の分きて立ち

七例の書きし  
たる文體にや  
へ山石榴（ツ  
ジ）  
本歌可勘  
二人にけむかき  
心にや  
二枝に針のある  
事也  
三水のはり也  
三黒木は皮つき  
の木也  
雨夕映、夕榮、  
夕に色のます也

ならずらむも、心ことなり。唐葵はとりわきて見えねど、日の影に随ひてかたぶく  
らむぞ、なべての草木の心とも覺えてをかし。花の色は濃からねど、咲く山吹に  
は。岩罅もことなる事なけれど、「折りもてぞ見る」と詠まれたる、さすがにを  
かし。さうびは、近くて、枝の様などはむつかしけれどをかし。雨など晴れ行きた  
る水のつら、黒木のはしなどのつらに、亂れ咲きたる夕ばえ。  
○みてぐらなどに——御幣也、蘆の花のさま御幣に似たればなるべし。本語あ  
るか可勘。

○もじもすゝきには——文字なりも、蘆と薄とをとらぬと也。イ本もえしもす  
すきにはとあり。萌え出でくるかたちの、薄にをとらぬと也。

○ほさきのすはうに、いとこき——穂の色の蘇枋に染みしやうなる也。是をま  
すうのすゝきといふ也。

○おほどれたるともしらで——源氏あづまやに、おほどれたるこゑしてとあ  
り。孟津抄に、おほどけたる也とあり。薄の穂のそゝけひるごりたるなり。あ  
しきをもしらで、猶はつをばなのむかしおもひ出でがほになびくと也。

○かひろぎたてる人にこそ——かいひろごりたてる人のありさまに似たると  
也。

○よそふる事ありて——此の薄を老いはてたる物のさまなどに、思ひよそふる

事あらば、哀ならむと也。

○さをじかのわきて——後撰、貫之、「行きかへり折りてかざさむ朝なく、  
たちならすのべの秋萩」又「さを鹿の立ちならすをの秋萩におけるしらつゆ  
我もけぬべし。」

○からあふひ——唐葵、催馬楽淺緑の詠物に、からほひとあるも是也。童蒙抄  
云、向日葵とて日の影にかたぶく也云々。文選廿九、陸士衡園葵詩、種二葵此  
園中、葵生、傳、朝榮東北傾、夕顯西南啼、註李善曰、淮南子曰、聖人於  
道猶二葵之與日。

○いはつゝじ——白氏文集十二云、山石榴、一名山歸國、一名杜鵑花、杜鵑啼  
時花樸々々。

○くろきのはしのつら——黒木階面也、龜相なる階のほとり也。朗詠云、階底  
蕭微入、夏開。

五十九

おぼつかなき物 十二年の山ごもりの法師のめおや。知らぬ所に、聞なるに行きた  
るに、あちはにもぞあるとて、火もともさで、さすがに並みある。今出てきたる  
者の心も知らぬに、やむことなき物もたせて、人のがりやりたるに、遅く歸る。物

一イニゆきあひ  
たるさあり可用  
敵  
ニしらぬ人々に

火あかくてば、  
あまみ顯證なら  
むきて態と火さ  
もさで也  
三並居也  
四此の頃來たる  
從者の事也  
五反覆也  
六うつくしき色  
も見えね也

いはぬ乳兒のそりくつがへりて、人にも抱かれず泣きたる。暗きに莓食ひたる。人の顔見知らぬ物見。

○おぼつかなき物——物の分明ならず、心もとなき心也。

○十二年の山ごもりのほうしのめおや——後撰集十の詞書に、「男のほど久しうありてまうできて、御心のいとつらさに、十二年の山籠りしてなむ、久しうきこえざりつる」と云々。比叡山などに禁足してこもる事也。此の草紙の心は、山法師の久しく禁足してあるに、父は行きても相見るべきを、母は登山かなはねば、十二年のほど、最もおぼつかかなかるべし。

○やむごとなき物もたせて——無止やムゴトナキ 江次第書けり。こゝは大事におもふ物を持たせて、他所へやりし也。

○人のかほ見しぬ物見——祭の供、俗人なども、見知りてこそは一入おもしろかるべければ也。

六十

一たさへむかた  
なくかはりたる  
心也  
二藍  
三黄葉

たとしへなき物 夏と冬と。よると晝と。雨降ると日照ると。若きと老いたると。人の笑ふと腹立つと。黒きと白きと。思ふと憎むと。藍と黄葉と。雨と霧と。同じ人ながらも心ざし失せぬるは、まことにあらぬ人とぞおぼゆるかし。常磐木多かる

所に、鳥の寝て、夜中ばかりに、いねさわがしく落ちまどひ、木づたひて、寝おびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみめにはたがひてをかしけれ。

○あめと霧——イ本 此の次に、火と水と、肥えたる人とやせたる人と、髪長き人とみじかき人とあり。

○おなじ人ながらも、心ざしうせぬるは——白氏文集大行路に、人心好悪苦不常、好生三羽毛一悪生三瘡。又云、妾顔未改君心改。又云、君不見左納言右内史朝、承恩幕賜死、行路難不在水不在山、只在人情反覆間、といへるさまに似たり。

○いねさわがしく——いねわろき事也。イニ いねさがなくとあるもおなじ。

六十一

一人に忍びて達  
ひたる所也  
ニたがひにむつ  
ごとのさしいら  
へする也  
三イラへ  
四あらはなる事  
也  
五食にまつはれ  
て也

忍びたる所にては、夏こそをかしけれ。いみじう短き夜の、いとほかなく明けぬるに、つゆ寝ずなりぬ。やがてよろづの所あけながらなれば、涼しう見渡されたり。猶今少しいふべき事のあれば、かたみにいらへどもする程に、ただ居たる前より、鳥の高く鳴きて行くこそ、いと顯證なる心地してをかしけれ。冬のいみじく寒きに、思ふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音の、ただ物の底なき様に聞ゆるもをかし。鶏の聲も、はじめは羽のうち、口を籠めながら鳴けば、いみじう物深く遠

六ふすまのうちにてきくゆえ也  
七こゑのあざやかなるをいふ也

きが、つき〜になるまゝに、近く聞ゆるもをかし。

- 忍びたる所にては——是より又別の事の、鳥の興ある事をいふ筆すさび也。
- 冬のいみじく——前に夏の事をいひたれば、こゝは又冬の事をいふ也。
- つき〜になるまゝに——次々也、世に一番鶏、二番鶏などいふ次第々々也。

六十二

一懸想、我に心をかけてきたる人也  
 二來也  
 三彼の來たる人の供也  
 四イをのこわらはなごのうきけしき見るにぞのえも  
 五不情がるさま也  
 六イあくびて七密也、おのれにひそかにいふと思ふらぬ也

懸想人にて來たるは、いふべきにもあらず。ただうち語らひ、又、さしもあらねど、おのづから來などする人の、簾のうちに、數多人々居て物などいふに、入りて、とみに歸りげもなきを、供なるをのこ、童など、斧の柄も朽ちぬべきなめりとむつかしければ、長やかにうちながめて、みそかにと思ひていふらめども、「あなわびし。煩惱苦惱かな。今は夜中にはなりぬらむ」など云ひたる。いみじう心つきなく、かのいふ者は、とかくも覺えず。此の居たる人こそ、をかしう見聞きつる事も失する様に覺ゆれ。又、さは色に出でては得はずあると、高やかにうち呻きたるも、「下行く水の」といとをかし。立部、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるも、いとにくし。よき人、君達などの供なるこそ、さやうにはあらぬ。ただ人などさぞある。數多あらむ中にも、心ばへ見てぞ率てありくべき。

こなたへ聞ゆる事也  
 一供の者のいふ事也  
 二苦惱也  
 三下人の事なれば、さして心なしともおほえず也  
 四かやうの下人を具せし主人こそ也  
 五日頃此の人ををかしと見聞きし興もさむる也  
 六是も供人の詞也  
 七こなたへきこえよとおもふさまなるべし  
 八清少の心也、いはぬは猶いふにまさるものをと也  
 九是も供人の主をおどろかし備

○けさう人にて——此の段は供なる人の心なきを、つれまじき事をいふに、懸想人の供の心なきは勿論、只かたらふ人などの供の、心なきもわるき事をいふ也。

○すのうちにてあまた人々——清少は簾中にて、女房どち物がたりするに、彼の來たる人も入りて、顔にも歸るけしきなげなる也。

○をのえもくちぬべき——河海云、六帖、「をのえはくちなば又もすげかへむらき世の中にかへらずも哉」晉の王質が石室山にいたりて、一局の碁を見るほどに、斧の柯の朽ちたりし事也、述略記に委し。

○ながやかにうちながめて——をのえも朽ちぬべしと、詠吟せし也。イ本うちあくびては、長あくびする也。

○又、さはいろにいでは、えいはず——さやうに我らは、煩惱、苦惱など、詞にいではえいはずと、おとなしやかにいふ也。是もいはぬやうにて、あてていふ詞也。

○したゆく水のと——六帖、「心にはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる此のうたは、ならの帝盤手といふ鷹を愛して、大納言にあづけさせ給へるに、大納言其のたかををらして、元尊ね出でざる事を奏し申されたれば、帝物もの給はせ給はで、「いはでおもふぞいふにまされる」との給ひしに、

す詞也  
六只人の供は、  
さやうに心づき  
なき也  
三將也

後人上の句をさまさまつけたるよし、大和物語にあり。  
○すいがい——透垣也。  
○あまたあらむ中にも——あまた下人あらむ中にも、さやうに心なき者には  
あらぬと、心ばへをよく見て、召しつれありくべき事ぞと也。

春曙抄三終

枕草子春曙抄 卷四

六十三

ありがたきもの 舅しゅうに譽ほめめらるゝ婿むこ。又、姑しゅうに思おもはるる嫁よめの君きみ。ものよく抜ぬくる  
しろがねの毛け拔は。主しゅそしらぬ人の従したが者もの。露つゆの癖くせかたはなくて、かたあ心こころさまもすぐ  
れて、世よにあるほど、いさゝかの瑕けが瑾ぎんなき人ひと。おなじ所に住すむ人の、かたみにはち  
かはし、いさゝかの隙ひまなく用もち意いしたりと思おもふが、邊つらに見みえぬこそかたけれ。物語、  
集あつなど書かきうつす本ほんに墨すみつけぬ事こと。よき双ふた紙かみなどは、いみじく心こころじて書かけども、必かなら  
ずこそきたなげになるめれ。男おとこも、女メも、法師ほうしも、ちぎり深ふかくて、かたらふ人の、  
求もとまで中なよき事ことかたし。使つかひよきずんざ。播は練れんうたせたるに、あなめてたと見みえて  
おこす。

○しうとめにおもはるゝよめのきみ、——莊子しやうしが外物篇がいぶつぺんに、婦フ姑コ勃ボ磔ツといへるに  
似にたり。唐夫人たうふじんの姑こに乳ちちをふくめしたぐひ。誰たれもこひねがふべき事こと也。  
○おなじ所にすむ人の——人馴ひとなれては、おのづから敬やうの心こころおとろへて、たがひに  
恥はづる心こころなくなる物ものなれば也。論語ろんごに晏平仲えんへいちゆう善よ與よ人交ひとまじ、久而敬ひさしくやう之これと孔子こうしの

一銀ぎんは性せいにぶく  
て鐵てつに及およばねは  
也  
二従したが者もの也  
三癖くせ /  
四片輪ぺんりん  
五少すくしも瑕けが瑾ぎんなき  
人ひと實じつに有ありが  
たかるべし  
六たがひに也  
七油斷あぶらなく心こころづ  
かひする也  
八實じつに有ありがた  
けれさいふ心こころ也  
九集あつ也  
一〇本ほん  
一一有ありがたしと  
也  
一二從したが者もの也  
一三播練はれん、紅べにの衣え

眼也、それを打殿にてうたせてつやを出す也  
一有りがたしとふくめたり

一是より別に禁中の局の事をいふ也  
二上小節、是より以下はそののよき故をいふ

ほめ給へる、まことにありがたき事なるべし。佛道にも慚愧は衆善之衣服といへり。慚はみづから恥ぢて悪行をせぬ也。愧は他人をはぢて悪事をやむる心也。人として此の慚愧の二つなくば、世間は父母兄弟妻子もなく、知識尊長大小の分ちもなく、畜生と同等也と經に説けり。  
○男も女も法師も契ふかくて——男女の中にかぎらず、法師もよく契りかたらふを和合僧といへり。大和物語に、のうさんの君といひける人、淨藏とはいとなら思ひかはす中なりけり。かぎりなく契りて思ふかたをもいひかはしけり云々。

○かいねりうたせたるに——源氏末摘花に、かいねりこのめるとあり。河海云、振練は両面ふくさ張にて中重なし。紅色也。玉葛巻の河海云、打殿張殿などとしてあり。男女の装束。うちのり本體也。板びきのりなどは略儀なり云々。

六十四

内の局は、細殿いみじうをかし。かみの小節あげたれば、風いみじう吹き入りて夏もいと涼し。冬は雪、霰などの、風にたくひて入りたるも、いとをかし。せばくて童などのほり居たるもあしければ、屏風の後などに置しすゑたれば、こと所のやうに、聲たかく笑ひなどもせて、いとよし。晝などもたゆまず心づかひせら

人々推  
五里の親類など  
の置なるべし  
四彼の籠をかく  
しおく也  
五禁中の籠なれ  
は、置も心する  
也  
六宮仕の心也、  
禁中なれば晝夜  
敬心に油断なき  
也  
七禁庭を行きか  
ふ人の香の音也  
八小指  
九戸を叩く音  
一〇そらねしたる  
さま也  
一一句  
一二身動、身うま  
かす也  
一三それなりと  
也  
一四いらいぬと推せ  
ん也  
一五戸た、きし人  
の扇をつかふ也  
一六是も内のさま  
を外にてねいら

る。夜はたまして、いさゝかうちとくべくもなきが、いとをかしきなり。香の音の夜ひと夜聞ゆるがとまりて、只および一つして叩くが、その人ななりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しく叩くに、音もせねば、寝いりにけるとや思ふらむ。ねたく、少しうち身じろく音、衣のけはひもさななりと思ふらむかし。扇など使ふもしるし。冬は火桶に、やをら立つる火箸の音も、忍びたれど聞ゆるを、いとど叩きまさり、聲にてもいふに、かげながらすべりよりて聞く折もあり。

○ほそどの——素殿河海、三光院御説、廊、ホソドノとよめり。舊記に、廊をホソドノと點ず。是も其の心か前註。

○とまりてただおよび一つしてたゞくが——ほそどのの清少の局へ忍びこくる人の香の音の、この局の前にてとどまりて、ひそかに小指にてたゞく也。戸をたゞく也。

○さななりとおもふらむかし——内に身うごかし、衣の音などするは、ねいらぬとやねたくも推しつらむ。扇をつかひなどけしきはむさまも、しるくきこゆると也。

又、あまたの聲にて、詩を誦し、歌などうたふには、叩かねどまづあけたれば、こへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなく、立ちあかすもをかし。御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷子いとあざやかに、裾のつま少しう

ぬき聞きし心也  
 二聲にてもこ、  
 明け給へまといふ  
 也  
 三内より物陰に  
 よりて、其のま  
 まをきく也

一編也  
 二詩歌の詠に感  
 じてあくる也  
 三こゝろざしあ  
 りてきたるにあ  
 らねは也  
 四最也  
 五是より男たち  
 のさま也  
 六不廻  
 七廻廻の袖也、  
 前註  
 八聲也  
 九イかたに  
 一〇聲によりるし  
 さま也  
 二押

て、半身内へ入  
 りたるさま也  
 二外より見ては  
 優ならむさま也  
 三半身入りたる  
 人のさま也  
 四鏡をこひよせ  
 かりて也  
 五簾額也  
 六簾卷きあけた  
 るさまにや  
 七たいていのせ  
 いたけの人に  
 みな顔のほかに  
 几帳のあたむ  
 さま也

一臨時の祭の調  
 樂也  
 二炬火也  
 三寒き夜の體に  
 や  
 四炬火のさまの  
 物に近きさま也  
 五管絃のはじま  
 る也  
 六イたてて  
 七調樂に參らる

ち重りて見えたるに、直衣の後に、ほころび絶えず着たる君達、六位の蔵人の青色  
 など着て、うけばりて、遣戸のもとなどにそばよせてえたてらす。へいの前などに  
 うしろ押して、袖うちあはせて立ちたるこそをかしけれ。又、指貫いと濃う、直衣  
 のあざやかにて、いろ／＼の衣どもこぼし出でたる人の、簾をおし入れて、なから  
 入りたるやうなるも、外より見るは、いとをかしからむを、いときよげなる視ひき  
 寄せて、文書き、もしは鏡乞ひて、鬘などかきなほしたるも、すべてをかし。三尺  
 の几帳をたてたるに、簾額のしもは唯少しぞある。外に立てる人、内に居たる人と  
 物いふ顔のもとに、いとにくくあたりたるこそをかしけれ。鬘のいと高く、短から  
 む人などやいかがあらむ。猶よのつねのは、さのみぞあらむ。

○又あまたのこゑにて詩をずし——是は忍びて來る人にはあらで、ただあひか  
 たらふ人々の聲をききしさまなるべし。

○こゝへとしもおもはぬ人も——此の方より戸をあけたれば、との局へこむと  
 は思はぬ人も、先づ立ちとどまると也。

○すそのつますこしうちかさなり——几帳のもとより、女房のきぬのすそのは  
 づれのすこし見ゆるさま也。

○うけばりて——河海云、諸、承諾、はばかりる事なきをいふ也。我はと思へる  
 體也。此双紙の心はさやうに我はがほにはえたてらす、少しそぼめたるさま

也。

○袖うちあはせて——袖かき合せてとい、心也。つゝしめるさま也。

○いろ／＼のきぬどもこぼし出——さしぬきのわきなどより、下着の色々に見、  
 えたるさまなり。

○物いふかほのもとに、いとにくくあたり——外の男、内の女と物いふ顔の程  
 に、彼の三尺の几帳のあひあたり隔たるゆゑに、にくくといふ也。

○たけのいとたくみじかからむ——背たけのすぐれて高き人と、一向にせい、  
 短き人などは、何も几帳にはづれやせむ、いかがあらむと也。

まして、臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。とのもりの官人などの、長き松  
 を、高くともして、頸はひき入れて行けば、さきはさしつけばかりなるに、をか  
 しうあそび、笛ふき出でて、心ことに思ひたるに君達の日の装束して、立ちとま  
 り物云ひなどするに、殿上人の隨身どもの、さきを忍びやかに短く、おのが君達の  
 れうに追ひたるも、あそびにまじりて、常に似ず、をかしう聞ゆ。夜更けぬれば、  
 猶あけて歸るを待つに、君達の聲にて、「あらたに生ふるとみ草の花」と歌ひたる  
 も、此の度は、今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ。すくすくしうさ  
 し歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しばしや。など、さ夜を捨て急ぎ給ふ」と  
 ありて」などいへど、心地などや悪しからむ、倒れぬばかり、もし人や追ひて捕ふ

る人々也  
 八東帯の事也  
 九イ供の事也  
 一〇ひそかに参拜  
 (アイヒツ)する  
 也、てうがく始  
 れは高くはさき  
 をおはで、我主  
 君のためばかり  
 に園(シツカ)に  
 座みじかくさき  
 おふ也  
 二音樂の事也  
 三夜明けに舞人  
 樂人などの歸る  
 を見むと待つ也  
 三眞人也、きす  
 ぐなる人也  
 四事果てたりさ  
 て急ぎ出づるな  
 るべし  
 一五しほし持ら給  
 へ也  
 一六何さてさやう  
 に露明けぬ夜を  
 見捨て、急ぎ給  
 む也

ると見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

○まして——前にすべて、かし、をかしけれなどあるをうけて、ましてと也。  
 ○りんじのまつりのてうがく——宗祇、帚木の別勘云、臨時の祭とは北祭の事也。十一月酉也。調樂は午の日也。大内にてある事也。愚案、江次第十日、寛平元年十一月廿一日有賀茂臨時祭事、右近中将藤原時平爲使云々。これ初めにや、猶其の次第等委し。其の祭に舞樂あるを禁中にて先づ試樂有りて、次に調樂よて、樂人舞人等をと、のへさせ給ふ事也。  
 ○とのもりの官人などの長き松——主殿司は炬火庭火などをつかさどる者也。  
 江次第臨時祭の試樂に、主上人御の時若及昏黒、主殿官人奉三炬火於庭中一とあり。これ調樂の時ならねども、大かた其のさま是に准へて知るべし。  
 ○日のさうぞく——源氏には日のよそひとあるを、細流に東帯也。直衣は宿衣也。東帯は晝のよそひ也。  
 ○殿上人の隨身ども——中將、少將などの召し具せられし隨身也。イ本、供の隨身とあるは彼の君達の隨身也。  
 ○あらたに生ふるとみ草め花——うたひ物なるべし。大鏡云、一條院の御時の臨時の祭に御前の事果て、上達部たちの物見に出で給ひしに、外記のすみのほど過ぎさせ給ふと、わざとはなきて口ずさびのやうにうたはせ給ひし。とみ

一七倒れぬべきは  
 急ぐ也  
 一 是より又別段  
 也  
 二 中宮の定子の  
 おはす也  
 三 木立也  
 四 屋臺の様體也  
 五 イけうこくす  
 ずらう  
 六 そぞろ也  
 七 中宮の御座な  
 るべし  
 八 陽明門也、前  
 註  
 九 應春門也、前  
 註

草の花てにつみいれて、宮へまゐらむのほどを、例のには、かはりたるやうに承りたりし云々。是此の双紙とおなじ詠物のつづきなるべし。とみ草は、稻の事と梁塵愚案抄にあり。  
 ○とありてなど——しばし有りてと也。とばかりありてなどいふと、おなじ心なるべし。

六十五

職の御曹司におはしますころ、木立などはるかに物ふり、屋のさまも、高うけどはけれど、すづろにをかしう覺ゆ。身屋は鬼ありとて、皆へだて出だして、南の廂に御几帳たてて、又廂に女房はさぶらふ。近衛の御門より、左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかければ、おほさき、こさきと聞きつけて置く。あまた度になれば、其の聲どもも皆聞き知られて、「それぞ、それぞ」と云ふに、又「あらず」など云へば、人して見せなどするに、云ひあてたるは、「さればこそ」など云ふもをかし。  
 有明のいみじうきり渡りたる庭に、おりてありくを聞き召して、御前にも起きさせ給へり。うへなる人は、皆おりなどして遊ふに、やう／＼明けもてゆく。左衛門の陣にまかりて見むとて行けば、我も／＼と追ひつぎて行くに、殿上人あまた駭して



一是も障(サキ)ノ障也  
 二障に付きて美人ぞかの人ぞ  
 三おしはかりにいふ也  
 四それにはあらずさあらそふもある也  
 五清少等の女房のおりて月見あり也  
 六后宮にもおきさせ給ふ也  
 七お人々のかざりはみな  
 八天明也  
 九清少などのおく其の外の女房も追々に行く也  
 一〇何々一聲の秋といふ心也  
 一一元イまるる  
 一二殿上人の女房達の月見るにめでて歌よみかけしもあり也

「なにがし一聲の秋」とずんじて入る音すれば、にげ入りて物など云ふ。「月を見給ひける」などめてて、歌よむもあり。夜も寝も、殿上人の絶ゆる折なし。上達部まかて参り給ふに、おぼろげに急ぐことなきは、かならずまゐり給ふ。

○もやはおにありとて——化生の物ありとておそれて歸りて也。南殿の鬼の貞信公をおびやかし、河原院の靈の京極の御息所をとりいれし類。古今著聞第十七變化の部に、猶此のたぐひ多し。

○殿上人のはみじかければ——上達部と殿上人とは随身の障(サキ)障も差異あるにや。前にも殿上人の隨身どもさきを忍びやかにみじかくとあり。

○おほさきこさき——上達部の前(サキ)詞を、大ききといひ、殿上人のを、こさきといふとかや。みな隨身の故實なるべし。

○あまたたびになれば——其の聲度々きけば、其の聲を女房の皆聞き知りて也。

○なにがし一こゑの秋——古詩を朗詠する也。是河原院にて夏日閑(ヒサシ)暑といふ題を、源英明、池冷水無三、伏夏、松高風有二一聲秋といへる句を、何々一聲の秋と、やはらかに書きたる文の一體なるべし。

○まかてまゐり——上達部の禁中を退出し、又参内せらるるに、大かたに急なる公用などなきは、后宮へ参上と也。后宮の御成勢をいふなるべし。

六十六

あぢきなきもの わざと思ひたちて、宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりて、うるさげに思ひたる。人にもいはれ、むつかしき事もあれば、「いかでかまかてなむ」といふこと草をして、出でて親をうらめしければ、「また参りなむ」と云ふ。とりこの顔にくさげなる。しづくに思ひたる人を、しのびて聲にとりて、思ふさまならずとなげく人。

○わざとおもひたちて——親の態々思ひたちて、禁中へまゐらせしむすめ也。

○人にもいはれ、むつかしき事も——宮仕(ミヤツカシ)するさげ也と人にもいひたてられ、我も實に物うければ也。

○いかでかまかてなむといふことぐさを、して出でて——何とぞして里へ退出せむとつねの言種(コトツネ)にいふ也。ことぐさは口ずさびに常に云ふ也。

○おやをうらめしければ——里亭へ出でて、親は宮仕を物うげなりと、いさめなどして、うらめしければ也。

六十七

いとほしげなきもの 人によみて取らせたる歌の響めらるる、されど、それはよ

三イよ  
 二大かたにて也  
 一出たしたてし心なるべし  
 二願、宮づかへをうんじたるさま也  
 三あぢきなき心をふくめし也  
 四美子の顔の我にやさしからぬ也  
 五はじめより髪にならんさま思はざりし人也

一此詞にて清少

の頓着なき本性  
見えて奇特にや  
二遠國へ下る人  
也  
三人のもしへ也  
四等閑と書く、  
心にもいらぬ事  
なれば、大かた  
に書きてやりし  
也  
五無徳也。せん  
なきさまにいひ  
なす也

し。遠きありきする人の、つぎ／＼縁たづねて、文得むといはずれば、知りたる人のがり、なほざりに書きて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事もとらせで、むとくにいひなしたる。

○いとほしげなきもの——をしからぬ心もあり。愛想なきこゝろもある也。

○されどそれはよし——人のためにして其のかひあればよしと也。此次に人のためにしても其のかひなき事をいはんとて也。

○つき／＼えんたづねて文えむと——清少へ付々の縁を求めて、彼の遠國に清少の知人の方へ、狀をそへよと望む也。

○なまいたはりなりと——彼の知人文體のいたはりなきに腹立ちして、返事もせぬ也。もとより心にもいらて等閑に出だしし添狀なれば、返事なくてもをしげなきとの心也。

六十八

一イはうし

心地よげなる物 卯杖のことぶき。神樂の人長。池のはちすの村雨にあひたる。御靈會の馬長。又、御靈會の振幅。

○うづゑのことぶき——卯杖は正月上の卯日、東宮を始め奉り、左右の兵衛府、作物所などより、大内へたてまつる事也。祝の杖とも歌によれば、其の祝

言也。江次第二裏書云、仁壽二年正月諸衛、獻二祝杖、返二點魁云々これ也。

卯杖とて桃椿などにてつくれる杖也。イニうづゑのほうし、追而可考。

○神樂のにんぢやう——人長は神樂の舞人、陪從などの長也。内侍所の御かくらに、韓神、其胸などの時起つて舞ふもの也。内侍所の御神樂は、一條院の御時はじまれるよし江次第にあり。其次第等猶くはし。

○御りやうゑの馬をさ——六月十四日祇園の御靈會に、禁中より馬をむかひひかれし也。公事根源云、祇園御靈會十四日、此のまつりの日禁中にはことなる事なし。馬長など催しつかはさるれども御覽はなし。祇園の社は貞觀十一年に託宣の事ありて、山城の國には、うつし奉りしにや。素達鳴尊の童部にて、牛頭天王とも武塔天神とも申す也云々。

○又御靈會のふりはた——是も祇園會に、むかし振幅といふ事ありしにや。今は絶えたる儀式にて知りがたし。

六十九

一イこどり

とりもてるもの 傀儡のこととり。除目に第一の國得たる人。

○とりもてる物——此の詞異本にはなくて、くぐつのこととりをも、前の心ちよげなる物の内に書きつらねたり。

一イ又の日  
ニイちこくの云  
三地獄のありさ  
四后宮の清少に  
仰せらるゝ也  
五紫中にての清  
少の局にや  
六后宮の御局へ  
帯の召す也  
七道方六條左大  
臣兼信六男正二  
位中納言  
八清少道方ノ身  
九物也  
十行成御にや

○くぐつのこととり——傀儡の琴取にや、イなくぐつのこととりとあり、可尋之。  
○除目に第一の國得たる——正月あがためしの除目に、大國などの受領に成りたる事なるべし、大國、上國、中國、下國とてあり。職原抄に委し。

七十

御佛名のあした、地獄繪の御屏風取り渡して、宮に御覽せさせ奉り給ふ。いみじうゆゝしき事限りなし。「是見よかし」と仰せらるれど、「更に見侍らじ」とて、ゆゝしさに、うへ屋に隠れふしぬ。雨いたく降りてつれづれなりとて、殿上人、うへの御局に召して、御あそびあり。道方の少納言琵琶、いとめてたし。清政の君等の琴、行成笛、經房の中將笙の笛など、いとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたる程に、太納言殿の、「琵琶の聲はやめて、物語すること遅し」といふ事を、ずんじ給ひしに、「隠れ伏したりしも起き出でて、罪はおそろしけれど、猶物のめでたきは、えやむまじ」とて笑はる。御座などのすくれたるにはあらねど、折のこゝと更に作りいでたるやうなりしなり。

○御佛名のあした——是より例の物がたり也。十二月の御佛名三ヶ夜過ぎて明朝の事なるべし。年中行事歌合註云、佛名は十九日より廿一日まで三ヶ日の

一御屏風は西宮正  
本御座の御佛名  
長徳二年八月廿  
五日に、左近中  
將  
二地獄也  
三伊周公たるべ  
し  
四文集の琵琶行  
の語(云)を詠吟  
也  
五前に清少のう  
へ屋にかくれふ  
しぬと有りし也  
六地獄のまは  
見ずして、此歌  
吟に感ずれば也  
七人々に笑はれ  
し也  
八大納言の詠吟  
の事也  
九是より別段也  
一清少の事を誰  
にても隠せしな  
るべし  
二三清少をいひく  
たし給ふ也

間、三世の清少の御名を唱へて六根の罪を悔悔し侍る心也。寶曆五年十二月よりはじまる云々。佛名の表裏は延喜式圖書にあり。江次第に繪委し。  
○ちこくゑの御屏風とりわたし——御佛名の所より、后宮の御かたへ取りわたして見せまわらせ給ふ也。雲圖抄佛名の所に云、以三地獄繪御屏風七根立三七夕之間、有御鏡子等。或書云、若無三件御屏風之時、用三淡書御屏風云々。祭花物無三さまさまの悦の巻に、十二月の十九日になりぬれば、御佛名とて地獄繪の御屏風などとう出てしつらふとあり。

七十一

頭中將のそぞろなる虚言を聞きて、いみじういひおとし、「何しに人と思ひけむ」など、殿上にて、いみじくもなむの給ふと聞くに、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてむ」など笑ひてあるに、黒戸のかたへなど渡るにも、障などする折は、袖をふたぎて、露見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もいれで過ぐす。

○頭中將——勅物云、齊信納正曆五年八月廿八日、藏人頭。長徳二年四月廿四

清少の傳聞也  
 護人のいひな  
 しなればなり  
 清少の行きか  
 よふ也  
 清少其のいひ  
 かけもせず見  
 れざる也  
 一の頃  
 禁中の御物忌  
 に頭中將こもり  
 也  
 清少の詞也  
 答也  
 長押の下は敷  
 居一つへたてて  
 次の間也。禁秘  
 抄に、帳南、西  
 北敷、爲三女  
 房座云々。是  
 にや  
 女房達清少の  
 きたるをよるこ  
 也  
 清少の心也  
 后宮のおはせね

日、任參議二世歳云々。恒徳公三男也。  
 ○くろどのかた——黒戸也。清涼殿の北の濠口の戸の西なる由拾芥にあり。  
 ○こゑなどするをりは袖を——清少の聲すれば、頭中將やがて顔に袖をおほひ  
 て清少を見給はぬ也。

二月つごもりがた、雨いみじう降りてつれづれなるに、御物忌にこもりて、「可さす  
 がにさうざうしくこそあれ。物やいひにやらまし」となむの給ふ」と、人々語れ  
 ど、「よにあらじ」などいらへてあるに、一日しにも暮して参りたれば、よるのお  
 とどに入らせ給ひにけり。長押のしにも、火近く取りよせて、さしつどひて、扇を  
 そつく。「あなうれしや。とくおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、  
 何しにのぼりつらむとおぼえて、炭櫃のもとに居たれば、又、そこにあつまり居て  
 物などいふに、「何がしさぶらふ」といと花やかに云ふ。「あやしう、いつの間に  
 何事あるぞ」と問はすれば、主殿司なり。「ただこゝに入つてならで申すべき事  
 なむ」といへば、さし出でて問ふに、「是頭中將殿の奉らせ給ふ。御かへりとく」  
 と云ふに、いみじく憎み給ふを、いかなる御文ならむと思へど、只今急ぎ見るべき  
 にあらねば、「いね今聞えむ」とて、ふどころにひき入れて入りぬ。猶人の物いふ  
 聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、「さらば、其のありつる文を賜はりて來」  
 となむ仰せられつる。とくくと云ふに、あやしういせの物語なるやとて見れ

は也  
 女房達清少の  
 はさりへあつま  
 りし也  
 外より何の誰  
 名有りて、清  
 少に使者のある  
 さま也  
 清少の詞也  
 只今こままり  
 たれ其のほごに  
 何事のありて人  
 のよぶぞ也  
 二清少間はず  
 也  
 三殿上人達より  
 の使なれば也  
 三三のもりづか  
 さが詞也  
 四清少のたち出  
 でて也  
 五此文齊信のま  
 ゐらせ給ふま  
 殿司のいふ也  
 六清少の心也  
 七清少の詞也  
 八主殿司又來て  
 也

ば、清き薄様に、いと清けに書き給ひるを。心ときめきしつるさまにもあらざりけ  
 り。「蘭省の花の時錦帳の下」と書き、「末はいかにく」とあるを、いかかはす  
 べからむ。御前のおはしまさば御覽せさすべきを、これが未知り顔に、たどくし  
 き眞名に書きたらむも見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、ただ  
 其の奥に、炭櫃の消えたる炭のあるして、「草のいほりを誰か尋ねむ」と書きつけ  
 て取らせつれど、返事もいはて、

- さすがにさうざうしくこそ——頭中將のいへりし詞也。清少をにくみながら  
 も、さすがに清少とかたらはねばさびしきに、物いひやらんと齊信のの給ふと  
 ある人清少に告げし也。
- よにあらじ——頭中將は我をうとみはて給へば、物いひおこせ給ふ事はあら  
 じとの心也。
- ひとひしにもくらし——その日一日清少の局に居暮して、夜に入りて后宮の  
 御かたへまゐりたれば、はや后宮は御寝ありしと也。
- よるのおとど——年中行事歌合註云、よるのおとどと申すは、天子の御寝所  
 なり。劍璽をおかるゝ故にいつも灯をけたず。是をかいともしと申すにやとぞ  
 云々。猶禁秘抄に委し。
- へんをぞつく——女房達爲突してある也。稱名院殿御説、篇つきとは文字の

一 草々返事給はらん也  
 二 清少の詞也  
 三 青藤様、ただの御の文のさま也  
 四 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也  
 五 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也  
 六 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也  
 七 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也  
 八 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也  
 九 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也  
 十 三思ひの外に何事にもあらぬ心の心也

つくりと篇とを分ちて、つくりを隠して篇をもつて、何といふ文字といひあつる事のたとへば嫁かくのごとくなるべし。橋姫巻に、恭うちへんづきなどあり。  
 ○人づてならで申すべき事なん——清少に直に可申事と也。  
 ○いねいまきこえむ——主殿づかさは先づかへれ。返事はやがてこれよりせむと也。  
 ○猶人の物いふききなど——立ち歸りて、彼のへんづきせし女房の、清少のほとりへきて物がたりするをききてあると也。  
 ○さらば其のありつる文を賜はりてことなむ——只今返事なくば、其の文とり返して来よと、頭中將のたまひしと也。  
 ○いせの物がたりなるや——伊勢物語に、長岡の母より業平へ、とみの事とて御文ありといへり。額は急々の事なればなり。  
 ○心ときめきしつるさまにも——頭中將さすがにさうざうしくこそあれ。物やいひにやらましとの給ひ、又とみの使をおこせて、青きうすやうに清げに書きたる文、おこせ給ふはいかなる心ばへぞ。にくみ給へる心も引きかへて、やさしきさまの事もやと、心ときめきせしに、思ひの外に何の事もなきと也。  
 ○らんしやうの——蘭省花時錦下、廬山雨夜草庵中。文集十七にも

三 中將の返事もなきなり

一 清少なきふしたる也  
 二 御所より清少の局へ也  
 三 源の御房、前の御返に鑑ふきし人也  
 四 清少を尋ねらるるなり  
 五 清少の詞也  
 六 さやうに也  
 七 源中將の詞也  
 八 清少の御前へまうのほらであるよと也  
 九 殿上の茶所也  
 一〇 御の心をもしりし人々をいふ也

の雨に頭中將は御物忌に籠りてつれづれなるに、清少は夜の御殿の飾帳の下に侍る事を思ひ准へて、此の上句を書きやり給ひし也。蘭省は尙書省とて政を行ふ所也。廬山は樂天の山居也。  
 ○草のいほりをたれかたづねむ——是ほどの事を誰か尋ねむとの心をいひて、我は頭中將にくまれければ、いかで問ひ給はむとの心をそへたり。  
 みな寝て、つとめていととく局におりたれば、源中將の辭して、「草の庵やある草の庵やある」と、おどろくしう問へば、「などてか、さ人げなきものはあらむ。玉の臺もとめ給はましかば、いで聞えてまし」と云ふ。「あなうれし。しもにありけるよ。うへまで尋ねむとしつる物を」とて、よべありしやう、頭中將のとのゐる所に、少し人々しきかぎり、六位まで集りて、萬の人のうへ、昔今と語りていひしついでに、猶此のもの、むげに絶えはでて後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づる事もやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず、つれなきがいとねたきを、こよひ悪しとも善しとも、定めきりて止みなむかし」とて、皆いひあはせたりし事を、「只今は見るまじき」とて、入り給ひぬ」とて、主殿司來りしを、又追ひ返して、「ただ袖をとらへて、東西をさせず、乞ひ取り持て來ずば、文を返し取れ」といまして、さばかり降る雨のさかりに遣りたるに、いと疾く歸りきたり。これとてさし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとうち見るにあはせてをめけ

二頭中將の詞、清少をさす也、無下は一向に也、三にくみながらもさすがにさ也、堪忍しかたき心也、三少しも、清少のていを云ふ也、四清少のありさまの善惡をさためむ也、五試みにかの圖書の花の時さいひやりし也、六東西也、七主殿司のかへりし也、八青きうすやう也、九さてはもその文を共のまゝ返したるさ見し也、十源中將なごの心也、十一草のいほりの返しなれ也

ば、「あやし。いかなる事ぞ」とて、皆寄りて見るに、「いみじきぬす人かな。猶えこそ棄つまじけれ」と見騒ぎて、「これが本附けてやらむ。源中將つけよ」などいふ。夜更くるまで附け煩ひてなむやみにし。此の事、必ず語り傳ふべき事なりとむ定めし」と、いみじくかたはらいたきまで云ひきかせて、「御名は、今は草のいほりとなむ附けたる」とて、急ぎたち給ひぬれば、「いとわろき名の、末まであらむこそ、口をしかるべけれ」と云ふ程に、

○などてかさ人げなき物は——草の庵と名付けたるをとがめて、きやうの名は聞きいれじ。玉の臺などよばれ候はむにこそ、出であはめと也。

○よべありしやう——昨夜のありさまはしくかたり給ふさま也。

○むげに絶えはててこそ——清少と一向に中絶しては勘忍しがたきと也。前にさうさうしくこそあれといへる首尾也。

○もしいひ出づる事もやと——彼の讒人のいひわけを、清少の方より云ひ出だすよとまでど、さもなくて、つれなくねたきとなり。前にいみじうにくみ給ふを、とかくもいはず見もいれで過ぐすとありし首尾也。

○只いまは見るまじきとて——前に只今いそぎ見るべきにあらねばと有りし事也。

○ただ袖をとらへて、とうざいをさせず——清少を東西に身ゆるぎもさせず返

源中將なごの

へりしにや

二世がたりにし

て、ほめ草にせ

む也

源是も源中將の

詞也

云前に草の庵や

あるくさいひ

しこさわり也

三清少のひみり

ごつにや

一則光の清少に

いふ詞也、草の

庵の事也

二清少御前にや

あらむして、是

まで尋ねしし

也

三清少の詞也

四則光が詞也、

いでは發語の詞

也

早く清少にい

ひきかせたく思

ふゆ五夜の明く

るをまちしま

事とりてきたれ。さなくばその文取リかへしてまゐれと也。

○かへしてけるかとうち見るにあはせて——かの文を見ると、一度に各感じてあつとわめきしと也。

○いみじきぬす人かな——清少を只人ならずと、ほめむとでざれていへる詞也。禪話に、此老賊などいふたぐひなるべし。

○これがもとつけてやらむ——彼の下旬に上句つけてやらむと也。修理亮則光、「いみじきよろこび申しに、うへにやとて参りたりつる」と云へば、

「なぞ。司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」と云へば、「いでまことに嫌しき事の上べ侍りしを、心もとなく思ひ明してなむ。かばかり面目ある事なかりき

とて、はじめありける事ども、申將の語りつるおなじ事どもをいひて、「このかへりごとにしたがひて、さる物ありとだに思はし」と、頭中將の給ひしに、ただに來

りしはなか／＼よかりき。もて來りしたびは、いかならむと胸つぶれて、まことに悪からむは、せうとのなめ悪かるべしと思ひしに、なのためにだにあらず。そこら

の人のほめ感じて、「せうとこそ聞け」との給ひしかば、下心にはいと嬉しけれど、

「さやうのかたには、更にえさぶらふまじき身になむ侍る」と申ししかば、「こと加へ聞き知れにはあらず。ただ人に語れとて聞かするぞ」との給ひしなむ、少し

口をしきせうとの覺に侍りしかど、「これが本つけ心見るに、いふべきやうなし。

也  
 六返事より主殿司のきたりし時也  
 七草の庵の返事のすぐれし事也  
 八歌連歌は不得心なる也  
 則光は歌連ひに見ゆ  
 九又人々の詞也  
 二前源中將の此の事必ずかたりつたふべき事也  
 三いへりし首尾也  
 二則光歌道不得心なれ也  
 三別に返歌をやせむ人々いひし也  
 四返歌せぬにはかへりておさるべけれ也  
 五前につかまめしありともきこえぬに、清少のいひしをうけ

ことに又、これが返しをやすべきなど云ひあはせ、悪き事いひては、なか／＼ねたかるべしとて、夜中までなむおはせし。これは身の爲にも、人の爲にも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召に少將のつかさ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむ」と云へば、子に數多して、さる事あらむとも知らず、ねたくもありけるかな。これになむ胸つぶれて覺ゆる。此の妹、兄といふ事をば、うへまで、皆しろしめし、殿上にも、つかさ名をばいはず、せうととぞつけたる。

○修理亮のりみつ——未勅、奥にかうぶりえて遠江介に任ず。行成卿よりも前に清少に通ぜし人也。

○なぞつかさめしありとも——司召は秋の京官の除目をいへり。江次第などに委し。除目に官を得し人はよろこぶとて、こなたかなたに拜賀の事あり。今則光よろこび申しにまゐりたりといふに付けて、司召もきこえぬに何に昇進せしぞと也。

○このかへりごとにしたがひて——前にこよひあしともよしとも、さだめきりてやみなむとの事也。

○ただにきたりしは中々——はじめ返事なくて主殿司の歸りしは、なまじひの返事あらむよりは、かへりてよかりしとなり。

○せうとのためも——則光清少と仲よき故、人々説に兄弟と申さるゝ事を今も

ていふ也  
 一清少の心也  
 二源中將、源中將などいひあはせし事ごもしろでさしいらへせし事の妬さ也  
 三清少則光のの中の事也  
 四修理亮は則光をいはず也

一則光清少也  
 二后宮の御詞也  
 一條院も此の草の庵の事をおぼせられし也  
 三清少の心也  
 四見也

云ふ也。實の兄弟にはあらず。

○せうとこそきけ——兄殿きかれよと、たはぶれの給ひし詞也。夕顔の巻に、右近のきみこそ先づ物見給へとあり。若紫の巻にも、うへこそなどある、おなじ詞也。

○ことくはへきしれとには——詞をくはへてつけ心みよとにはあらずと也。つけ心みよ、又此の句の面白きを、ききしれにもあらずと也。

○これがもつけ心みるに——彼の草庵の句の上句をつけ見るに及びがたしと也。

○少將のつかさえて侍らむは何ともおもふまじく——過分の昇進せむより、清少の名譽をよるこぶとなり。懇志をいへることばなり。職原抄云、少將相富正五位下、五位殿上人中爲三譜第公達一者任之下略。

物語などして居たる程に、「まづ」と召したれば、参りたるに、此の事仰せられむとてなりけり。「うへへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、をのことも、皆、扇に書きてもたる」と仰せらるるにこそ、あさましう、何のいせける事にかと覺えしか。さて後に、袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。

○まづとめしたれば——清少を后宮のめす也。少々用ありともまづ／＼まゐれと也。

「其あくるさし  
 二句  
 三后宮職、前註  
 清少守せら  
 るにや  
 五二十六日也  
 六齊信卿也  
 七頭中將清少に  
 懸懸なるべし  
 八局の戸早くあ  
 けよと也  
 九梅壺に清少手

○此事おほせられむとて——草のいほりの返事の事なり。  
 ○あさましう何のいはせ——我ながら心ならずもいひける草のいほりかなといふ心也。かく上つかたまで御沙汰を恥ぢおもへる心をいふ也。  
 ○袖ぎちやうなどとのりかけて——前に頭中將袖を顔にへだてて、清少を見おこせ給はぬ事ありし。几帳はかほかたちを隠しへだつる物なれば、袖几帳といふなり。此の事の後にはさやうに清少を見ぬやうにもせで、彼のそらごとゆゑのにくみも、頭中將の思ひなほりしと也。

七十二

かへる年の二月廿五日に、宮、職の御曹司に出でさせ給ひし御供にまゐらで、梅壺に残り居たりし又の日、頭中將の消息とて、「きのふの夜、鞍馬へまうでたりしに、こよひ方のふたがれば、たがへになむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。必ずいふべき事あり。いたく叩かせて待て」との給へりしかども、一局に一人はなどであるぞ、こゝに寢よ」とて、御匣殿召したれば、参りぬ。久しく寢おきておりたれば、「よるいみじう人の叩かせ給ひし。辛うじて起きて侍りしかば、うへにかたれば、かくなむ」との給ひしかども、よもきかせ給はじ」とて、臥し侍りにき」と語る。  
 ○梅つばに——梅壺は凝花舎といふ御殿の名也。梅をうゑられしゆゑの名と

はいかでか勝るぞ、みくしげのへきてねよと也  
 二定子の御いも  
 うと也  
 二御匣殿にね過  
 々して我局へお  
 りし也  
 三留守せし清少  
 の従者が詞也、  
 頭中將のたき  
 し也  
 三た、きし人の  
 詞也、清少を清  
 者のうへといふ  
 也。頭中將の來  
 しさいへも也  
 四清少の承引あ  
 るまじき心の心  
 也  
 一是亦頭中將の  
 消息也  
 二殿上より退出  
 することなるべ  
 し

ぞ。禁裏云、梅壺、西白梅東紅梅之由、在清少納言記とあるも、此段の奥に見えたる事也。こゝに定子のおはすにや。  
 ○くらまへまうで——鞍馬寺、水鏡云、延暦十六年、藤原伊勢人といふ人、貴船の明神の御をしへにてつくり奉りし也。元享釋書には、此の伊勢人の馬のとどまりし靈地なれば、鞍馬と名付けし由あれど、日本紀には、天武天皇の御馬とめ給ひし故の名と見ゆ。古よりの名なるべし。  
 ○こよひかたのふたがれば——鞍馬より清少へ方ふたがれば、今夜は外へ方違に行きて、明朝ゆかむと也。方ふたがりとは、天一神などの方にあたりたる夜を云ふ也。其の夜は其のふたがれる方へはゆかで、ことかたにて明して、そこよりは方あしからねばゆく事也。  
 ○みくしげどの——中關白道隆公の四君一條院の御匣殿、小一條院の母代と祭花物語の系圖にあり。拾芥云、御匣殿は貞觀殿の中にあリ、上藤の女房を別當とす、女藏人あり。河海云、御匣殿は内藏寮の外御服などたちぬふ所なり。  
 心もとなの事やとて聞くほどに、主殿前來て、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。只今まかり出づるを、聞ゆべき事なむある」といへば、「見るべき事ありて、うへになむのほり侍る。そこにて」と云ひて、局は引きもやあけ給はむと、心ときめきして懸はしければ、梅壺の東おもての半菰あげて、「こゝに」と云へば、めでたくぞあゆ



二清少の答也。后宮に用事にてまゐる也。三后宮にて承らむ也。四おもひさわびたる句也。六半部。七こゝにて頭中將にま見えむ也。八頭中將のさま也。九前に註す。一〇元の字也。一一洗ら也。一二前に註す。一三指貫のうはもんに也。一四折儀。一五直衣の下の御衣(オング)の色也。一六次麻也。下にかさなりたる色也。一七むかしのおものがたりの人も

み出て給へる。櫻の直衣いみじく花ばなど、うらの色つやなど、えもいはずけうらなるに、葡萄染のいと濃き指貫に、藤のをり枝、ことごとしく織りみだりて、紅の色、打目など、かがやくばかりぞ見ゆる。次第に白き薄色など、あまた重なりたる。せばきまゝに、片つ方はしもながら、すこし簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、是にこそはと見えたる。御前の梅は、西は白く、東は紅梅にて、少し落ちがたになりたれど、猶をかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。簾のうちに、まして若やかなる女房などの、羨うるはしく長く、こぼれかゝりなどそひ居ためる、今すこし見所あり、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふるふるしき人の、髪なども我にはあらねばや、塵々わななき散りほひて、大かた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍とも、あはひも見えぬ衣などもなれば、露のはえも見えぬに、おはしまさねば、裳も著す、袴姿にて居たるこそ、物ぞこなひに口をしけれ。「職へなむ参る。言づけやある。いつかまゐる」などの給ふ。「さてもとよべ、あかしもはてで、されどもかねてさいひてしかば、待つらむとて、月のいみじうあかきに、西の京よりくるまゝに、扇を叩きしほど、辛うじて寝おびれて起き出たりしけしき、いらへのはしたなさ」など語りて、笑ひ給ふ。「むげにこそ思ひうむじにしか。などさるものをばおきたる」など、げにさぞありけむと、いとほしくもをかしくもあり。しば

かやうならむと見ぬる也。一六養秘抄にいへるは是也。一七散りがたに也。一八髪のうちくしき也。一九是より清少のみづからのさまをいふ也。二〇髪のちりぎりこそ、けたるさま也。二一色のうす巻心也。二二かたなりたる色々もなき心也。二三元光(ハエ)様同。二四后宮は職の御曹司におはして梅壺におはさぬ也。二五興ざましなる也。二六頭中將の詞也。二七后宮へまゐる也。二八元清少御事付け

しありて出て給ひぬ。外より見む人はをかしう、内にいかなる人のあらむと思ひぬべし。奥の方より見出だされたらむうしろこそ、外にさる人やともえ思ふまじけれ。○はじとみあげて——花鳥餘情云、半部は下は格子はた板などをうちて、うへに部を釣りて外へ上るやうにしたるをいふ。車にも半部とてあり。上のしとみ斗をあげたれば半部とは名づけたる也。○せばきまゝにかたつかたは下ながら——縁などのせばき所なれば、腰などかけたるやうに、半身は下さまにて、簾のもととの長押などにより給ふ也。○ゑにかき物がたりのめでたき——おくにてうつぼ物語の仲忠の大將の事につけて、此の頭中將の事をいひ出づる事あり。それをかゝむとて、先づこゝにかやうにいふなるべし。○すのうちにまして——かやうの折ふしは、只にも人に見せまほしく美麗なるに、まして簾中に若き女房の髪うるはしきなどあらば、猶今すこし見所あるべきに、我が居て無興と也。○さだすきふるふるしき——尖過。源氏におほき詞也。年齢のなかばに過ぎて古めかしき事也。○かみなども我にはあらねばにや——上に若き女房の髪うるはしき事をいひし

申さぬかき  
 三いつ頃暇へは  
 まゐるぞと也  
 三是も頭中將の  
 詞也  
 三句  
 三言いたくた、か  
 せでまてこの給  
 ひし事也  
 三高島清少の局  
 をた、かれし事  
 也  
 三清少の局の留  
 守の從者がさま  
 也  
 三吳國の字也。う  
 らみいさどほ  
 心也  
 三尾清少の心也。  
 尤もうむじ給ひ  
 けむ也  
 三天頭中將のかへ  
 り給なり  
 三外也  
 三我が壁のつき  
 也  
 三外にさやうの  
 頭中將のやうな

に對して、我身にはさやうのうるはしさはなきにやと也。  
 ○大かた色ことなる頃——輕服などの時節にや。鈍いろを着用也。  
 ○ももきずうちぎすがた——裳は宮仕へ人の着する物なれど、后宮おはさねば  
 清少裳を着ずして、袴ばかり着たるさま也。  
 ○さてもよべあかしもはてで——かの方邊所より未明に歸りて、清少の局へ戸  
 たゞきよりし事を語り出だし給ふ也。  
 ○西の京よりくるまゝに——彼の方邊所なるべし。西京に、野寺町、細井小路  
 宇多小路、木辻など其の小路の名、拾芥に委し。  
 ○いらへのはしたなき——從者が答の事也。前にかくなむとの給ひしかども、  
 よもきかせ給はじといひし事なり。  
 ○などさるものをばおきたる——いかでかく、はしたなき從者を留守にはおき  
 しぞなど中將の給ふ也。  
 ○とより見む人はをかしう——外より見ては、此の頭中將の花やかなる形にて  
 かたらひ給へば、内の人ゆかしからむと也。  
 ○おくのかたより見出され——奥より見出さば、清少の形あしければ、外に頭  
 中將のやうなる人やあらむともおもふまじきと也。  
 暮れぬれば、御前に、人々おほくつどひ居て、物語のよきあしき、にくき所

る人やあらむと  
 も思はじと也  
 三句  
 一后宮へまゐ  
 りし也  
 二古物語草紙也  
 三いひかはす事  
 也  
 三語也  
 三侍思也  
 三后宮も也  
 七人々清少にい  
 ふ詞也、此の草  
 紙の善惡を申せ  
 也  
 八深切に也  
 九清少の詞何か  
 はよからむ也  
 一〇あまりの事  
 にて云ふこと也  
 一一人々の心也  
 一三人々の詞也  
 一三后宮の御こと  
 也  
 一四頭中將の事也  
 一五清少の見たら  
 ばと也

などをぞ定めいひしろひ、ずうじ、仲忠がことなど、御前にも、おとりまさりたる  
 事など仰せられける。「まづこれはいかに、とことわれ。仲忠が童おひのあやしさを、  
 せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「何かは、琴なども、天人おるばかり弾き  
 て、いとわろき人也。みかどの御むすめやは得たる」と云へば、仲忠がかた人と心  
 を得て、「さればよ」など云ふに、「此の事どもよりは、ひる齊信が参りたりつるを  
 見ましかば、いかにめで悪はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるゝに、人々、「さてま  
 ことに、常よりもあらまほしう」などいふ。「まづその事こそ啓せむと思ひて、まる  
 り侍りつるに、物語の事にまぎれて、とて、ありつる事を語り聞えさせれば、「誰  
 もく見つれど、いとかく驚ひたる。針目までやは見とはしつる」とて笑ふ。  
 「西の京といふ所の荒れたりつる事、もろ共に見る人あらましかばとなむ覺えつ  
 る。垣なども皆やぶれて、蒼生ひて」など語りつれば、宰相の君の、かはらの松  
 はありつや」といらへたりつるを、いみじうめて、西の方都門を去れること、  
 いくばくの地ぞ」と口ずさびにしつる事など、かしがましきまでいひしこそ、を  
 かしかりしか。  
 ○なかただがことなど——うつば物事に、仲忠の大將とて、わかこ君といひし  
 人の子にて、もつばの俊茂がむすめの腹に生まれし人。をさなくて母に孝有り  
 て、さまざまの奇跡あり。琴をよくひきて、帝の一の内親王を北方に退ふべき

一人々もただの  
 基をほむる也  
 三清少の詞也  
 頭中將の美々し  
 かりし事を申さ  
 るて也  
 六櫻の直衣以下  
 のいでたちあり  
 さまを申す也  
 五人々の詞也  
 三糸  
 三針目  
 三是も頭中將の  
 かたりし事也  
 三いとぞあはれ  
 ならむとの心を  
 ふくめたり  
 三是后宮の女房  
 也、前にもおく  
 にもあり  
 三頭中將の威は  
 て其の樂府を  
 なる也  
 三此のうけこた  
 へを御前の人々  
 威じていふ也

宜旨下りし事などあり。  
 ○わらはおひの。童生也。仲忠はわらはの生立より奇特有りし物ぞと、深切  
 に后宮にも仰せらるるぞやと清少にいふ也。仲忠に最負の人々の詞也。  
 ○きんなどもて人おるばかり——仲忠が琴ひきて、夏の空に雪をふらし、御殿  
 のかはらをおどせし事など、うつぼ物語に見ゆ。其の外琴をひきて天人の感じ  
 くだりし事、信の大、清見原の天皇などの事どもあれば也。  
 ○なかただがかたうどと思ひて——いとわるき人とはいへど、琴をひきし事な  
 どいふは、下心は清少も仲忠が方人と人々思ひて、さればよと云ふ也。實は清  
 少は頭中將をほむる下心ありて、仲忠をわるき人といひしなるべし。  
 ○ひるただのぶがまゐりたりし——前に職にまゐると頭中將の給ひし。此の詞  
 にて、まことにまゐられし事見えたり。  
 ○西の京のあれ——是頭中將の西京にかたゝがへにゆきしゆゑ、后宮の御かた  
 にてかたられし也。  
 ○かはらの松はありつや——西の京のあれで、垣やぶれ若生ひし事をかたるに  
 つけて、唐の驪山宮の長安の都の西にて荒れし事、文集の樂府にあるを思ひよ  
 そへて問へる詞也。  
 白氏文集四樂府云、驪山高、高々、驪山上、有レ宮、朱樓紫殿三四重、蓮々、今春、  
 日、玉、覽、暖、今温泉溢、網々、今秋風、山、澤、鳴、分、宮、樹、紅、翠、華、不、來、歲、月、  
 久、一、緒、有、レ、衣、兮、瓦、有、レ、松、吾、君、在、レ、位、已、五、載、何、不、三、一、幸、三、幸、其、中、一、西、去、一、都、門、  
 幾、多、地、下、略、

七十三

一清少の望亭へ  
 退出して也  
 二清少の心にこ  
 め忍びたるあや  
 まらなればさ  
 三且頃したしき  
 人にて也  
 四春宮に隠しき  
 旅の見まひには  
 あらで、懸想人  
 もくる也  
 五あまりに懸想  
 の見まひもむつ  
 かしければさ  
 六前に修理亮と  
 ありし同人也、  
 七官にや  
 八則光が詞也  
 九齊信卿の事也

里にまかてたるに、殿上人などの來るも安からずぞ、人々いひなすなる。いとあま  
 り、心に引き入りたる覺はたなければ、さいはむ人もにくからず。又、よるも盡  
 も、來る人をば、何かは、「なし」なども、かがやきかへさむ。まことに睡まじく  
 などあらぬも、さこそは來ぬ。除るるさくもげにあれば、此の度出でたる所を  
 ば、いづくともなべてには知らせず。經房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。左  
 衛門の則光が來て、物語などするついでに、「昨日も宰相の中將殿の、一妹のあり  
 所、さりととも知らぬやうあらじ」と、いみじう聞ひ給ひしに、更に知らぬよし申し  
 しに、「あやにくに強ひ給ひし事」など云ひて、「ある事あらがふは、いとわびしう  
 こそありけれ。ほとく、笑みぬべかりしに、左中將の、いとつれなく、知らず顔に  
 て居給へりしを、かの君に見だにあはせば、笑みぬべかりしにわびて、臺盤の上  
 に、あやしき布のありしを、只とりに取りて、食ひまぎらばししかば、中間にあや  
 しの食物やと、人も見けむかし。されど、かしこう、それにてなむ申さずなりに



少の返事次第に  
 したがはむと也  
 二和布  
 三清少のものと  
 則光の來ていふ  
 詞也、イせめた  
 てられて  
 三ひきゐてあり  
 きしと也  
 三イニし  
 二四辛也、めいわ  
 くの心也  
 二和布  
 二六彼のめくはず  
 心をしらで、返  
 事をさりたがへ  
 たると則光のい  
 ふ也  
 二七清少の心也  
 二八清少のうた也  
 元のりみつが詞  
 也  
 三彼の歌書きし  
 紙を、清少のか  
 たへあふぎかへ  
 してにけたる也

に、  
 かづきする海士のすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ  
 と書きて出したれば、「歌詠ませ給ひつるか。更に見侍らじ」とて、あふぎ返して  
 逃げていぬ。

○何のかく、こゝろもとなくとほからぬほどをたゞくらむ——奥深き家の門  
 を、誰きくまじきとて、かやうには何者のたゞくぞとなり。  
 ○左衛門の文とて——則光の文也。イ本左衛門のかみとてとあり。前に左衛門  
 尉とあり。奥に巡爵の事あれば、督といふ本あやまりなるべし。  
 ○みどきやう——河海云、本朝月令二月云々。季御讀經とは春秋内裏にて、大  
 誓若を講讀せらるるなり。引茶とて僧に茶をひかるゝ也。雲圖抄云、初日被  
 仰二度者、第二日引茶秋無之、番論義秋無之、第三日御論義下略圖あり。御裝束  
 など延喜式圖書に委し。江次第にもあり。  
 ○めを一寸ばかりかみにつゝみて——前に則光和布を食ひたるとかたりし故、  
 今も和布をやりて目くはするといふ心也、必ず我が有り所を語り給ひそと、め  
 くはする心也。奥の歌にて其の心見えたり。  
 ○一夜せめてとはれて、すずるなる——頭中將にあまりに清少の在り所を問は  
 れて、我もしらぬさまして、そぞるなる所へ中將をつれありきしと也。

一たがひに也、  
 則光と清少の中  
 の事也  
 二のりみつより  
 清少へ也  
 三館所ながらも  
 我をそれども  
 見給へ忘れ給ふ  
 なさなり  
 四ふのつねにの  
 りみつがいひし

○まめやかにさいなむに、いとからし——中將の眞實に我をせめうらみ給ひて  
 迷惑と也。  
 ○人のもとにさる物つゝみて——只に心もなくて和布をやる物かはと也。只に  
 はさやうの物を人にやる事はなき事なれば、取りたがへむやうもなき物をとの  
 心也。  
 ○かづきするあまの——歌、海士のすなどりするをかづきと云ふ也。歌の心  
 は、かの和布をつかはせしは、我が在り所をそこと、ゆめくいふなどの目く  
 はせならむと也。此のとまりめをくはせけりなど、いひつめざる所優美に心ふ  
 くみて面白きにや。此の歌後拾遺集に入りし詞書に、陸奥守則光藏人にて侍り  
 ける時などあり。此の草紙と同じ心なれば略之。  
 かうかたみにうしろ見かたらひなどする中に、何事ともなく、少し中あしくなりた  
 る頃文おこせたり。「びんなき事待るとも、ちぎり聞えし事はすて給はて、よそに  
 ても、さぞなどとは見給へ」と云ひたり。常に云ふ事は、「おのれをおぼさむ人は、  
 歌など詠みて得さすまじき。すべて、仇敵となむ思ふべき。今は限ありて、絶えな  
 むと思はむ時、さる事はいへ」と云ひしかば、此の返しに、  
 くづれよる妹背の山の中なればさらによし野の川とだに見じ  
 と云ひ遣りたりしも、まことに見ずやなりにけむ。返事もせず。さてかうぶり得て

五歌を我に給は  
るなまも也  
六うたよみて給  
はらば徳政にお  
もはむも也  
七うたよむ事を  
いふ也  
八かの則光の文  
の返事に也  
九清少のうた也  
〇則光鼓舞せ  
し也  
二江介也、返  
答のち受領せ  
しなるべし

とほたあふみの介などいひしかば、惜くしてこそやみにしか。

〇びんなき事侍るとも——たとひ便なく、うらめしとおぼす事有りとも也。  
〇いまはかぎりありてたえなむとおもはむ時——今は限りとかぎる心有りて、  
中絶えむと思ひ給はば歌よみ給へと也。

〇くづれよるいもせの——歌、彼の則光が文に、よそにてもさぞなどは見給へ  
といふをうけて、妹背の中もやうくくづれたれば、吉野川とも其の人とも、  
そなたにも見給ふまじきと也。古今、「流れては妹背の山の中に落つるよしの  
の川のよしや世の中」妹の山背の山とてあるを、彼のせうといもうとなど、人  
々のいひたるにとりあはせてよめり。

七十四

物のあはれ知らせ顔なるもの 鼻垂るまもなくかみてものいふ聲。眉抜く。

〇はなたるまもなくかみて——源氏に、鳴くことをはなかわといへり。さまで  
たらぬはなをたびくかみて、なくけしきするは、人に裏をしらせ顔なるも  
也。

七十五

一是より后宮の  
清少をめしまつ  
はす物たり也  
二后宮より清少  
を召さる、御文  
のはしに也、は  
し香の心也  
三左衛門陣の朝  
刻をはじめ、か  
かる禁中の御有  
様をいかでふり  
捨て、里住はす  
るぞとの心也  
四又朝朝もめで  
たからで、清少  
は里すみするか  
も也  
五畏也、里住し  
て宮仕を怠る恐  
れを申す也  
六うたひ給なご  
の詞にや  
七后宮よりの御  
詞也  
八面目なき事  
也、彼のうたひ  
宿なごにあきこ  
まはにや

さて、その左衛門の陣に行きて後、里に出ててしばしあるに、「とく参れなど仰言  
のはしに、「左衛門の陣、行きし朝ぼらけなむ、常におぼし出てらるる。いかしさ  
つれなく、うちふりてありしならむ。いみじくめでたからむとこそ思ひたりしか」  
など仰せられたる御返事に、かしこまりの由申して、私には「いかでかめでたしと  
思ひ侍らざらむ。御前にも、ざりとも、中なるをとめ」とはおぼしめし御覽しむと  
なむ思ひ給へし」と聞えさせたれば、立ち歸り、「いみじく思ふべかめるなり。た  
がおもてふせなる事をば、いかでか啓したるぞ。只今宵のうちに、よろづの事をす  
てて参られよ。さらすば、いみじく憎ませ給はむ」となむ、御言ある」とあれは、  
「よろしからむにてだにゆゑし。まして「いみじく」とある文字には、命もさなか  
ら棄てしなむ」とて参りにき。

〇さてその左衛門の陣に——前の有りがたき物といふ奥に、「有明のいみじう  
霧渡りたる庭などに、おりてありくを聞し召して、お前にもおきさせ給へり。  
上なる人は皆おりなどして、漸々あけもてゆく。左衛門陣まかりて見むとてゆ  
けば」とあり。その所を今いひ出でて、其の後清少の里へいでし事をいふなるべ  
し。〇さるもんのちんへいきし朝朝——是も彼の所の事を、后宮の仰せられし  
事也。其の所の詞に、おまへにもおきさせ給へりとある首尾也。其の時の事お  
ぼし忘れぬとの心也。

清少にまうの  
 二后宮の御せを  
 女房のかたより  
 云ふ也  
 二清少の心也  
 三文字也、文の  
 詞を云ふ也  
 三いのちの大事  
 をも捨てまゐら  
 むとて也

○わたくしには——后宮さへ思し召し出す朝郎を、清少が私にはいかでめで侍らざらむと也。  
 ○いみじくおもふかめるなり——清少の里居を誠によるしからず思し召すと也。かの清少の畏りの由を申せしに、答へ給ふ詞也。にくく思し召すにはあらで、清少を召しよせむとての事也。  
 ○たがおもてぶせなる——其の難し参程の面目なき事を、誰何にかけてはいひしぞと也。  
 ○よろしからむにてだに——大かたに、早くませ給はむとあるにてだに、ゆくしくいまはしきに、まして、いみじくにくませ給はむとある詞をききてはと也。

七十六

一いふも今更め  
 きて、たふさき  
 事と也  
 二清少まうのほ  
 りて二月めは  
 也  
 三乞食也  
 四法師の御

職の御曹司におはします頃、西の廊に、不慮の御讀經あるに、佛など懸け奉り、法師の居たるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、縁のもとにあやしき者の聲にて、「猶その佛供のおろし侍りなむ」と云へば、「いかでまだきには」といらふるを、河のいふにかあらむと、立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじく謀けたる行儀の、筒とかやの様に細く短きを、帯より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべ

にや  
 一清少の心也  
 二竹の筒のやう  
 に細く短き也  
 三衣のすそみじ  
 かき也  
 四かりはかまは  
 ぬす、けたる也  
 五猿のやう也、  
 かの乞食のさま  
 也  
 一〇清少の詞也  
 二乞食の答ふる  
 さま也  
 三其のいふこと  
 のはなやかなる  
 也  
 四屈の字也  
 五清少の詞  
 六尼が詞  
 七菓子也  
 八今ののしもち  
 さいふ物の類に  
 や  
 九よくなつきた  
 る心也  
 一〇尼がうたふ也  
 此のうたふす

からむ、同じ謀に謀けたるを着て、猿の様に云ふなりけり。「あれは何事いふぞ」と云へば、聲ひき繕ひて、「佛の御弟子にさぶらへば、佛のおろしたべと申すを、此の御坊達のをしみ給ふ」と云ふ。花やかにみやびかなり。かゝる者は、うちくむじたるこそあはれなれ、うたても花やかなるかなとて、「こと物は食はて、佛の御おろしをのみ食ふか。いと尊き事かな」と云ふけしきを見て、「なごかこと物も食べざらむ。それがさぶらはねばこそ、取り申し侍れ」と云へば、「くだ物、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、むげに仲よくなりて、よろづの事をかたる。若き人々出て来て、「男やある」、「いづこにが住む」など、口々に問ふに、をかしき事、そへ言などすれば、「歌はうたふや。舞などするか」と問ひもはてぬに、「よるは誰と寝む、常陸の介と寝む。寝たる肌もよし。」これが末いと多かり。又、「男山の峯の紅葉ば、さぞ名はたつ」と、頭をまろがし振る。いみじくにくければ、笑ひにくみて、「いねく」と云ふもいとをかし。「これに、何取らせむ」と云ふを聞かせ給ひて、「いみじう、などかくかたはらいたき事はせさせつる。えこそ聞かて、耳をふたきてありつれ。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と、仰言あれば、取りて、「それ賜はらすぞ。衣凍けたり。白くて着よ」とて、投げ取らせれば、伏し拜みて、肩にぞうちかけて舞ふものか。誠ににくくて皆入りにし。後にはならひたるにや。常に見えしらがひてありく。やがて常陸の介とつけた

三是も尼がいふ事也  
 三后宮のきこしめして也  
 三はやくいなせよこ也  
 三尼がきぬを取りて也  
 三助字也  
 三句  
 三今日に習ひて又此の尼が来たる也  
 三前の翁丸が所にも此の人あり元かやう／＼にて也  
 三其の有様を也三枝の尼のまねをさせて也  
 三右近内侍がこも也  
 三是は又こも尼也  
 三願ひたちが花やかなるさは、かたりたる也

り。衣もしろめず、同じ煤けにてあれば、いづちやりにけむなどにくむに、右近の内侍の参りたるに、「かゝる者なむ語ひつけて置きためる、かうして常に来ること」と有りしやうなど、小兵衛といふ人して、まねばせて聞かせ給へば、「あれいかで見侍らむ。必ず見せさせ給へ。御得意なり。更にも語らひ取らじ」など笑ふ。其の後又、尼なるかたはの、いとあてやかなるが、出て来たるを、又、呼び出て物など問ふに、これははづかしげに思ひてあはれなれば、衣一つ賜はせたるを、伏し拜むはされどよし。扱てうち泣き喜びて出てぬるを、はや此の常陸の介、行きあひて見てけり。其の後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でむ。

- ふだんの御どきやう——中宮には春秋に季の御讀經あれど、こゝは別に不斷に御祈禱のため、おこなはせ給ふなるべし。
- 猶その佛供の——はじめより物をこひたるが、法師などの、しばしまてといへど、猶佛供のおろしを賜はらむといふ也。
- いかでまだきには——速也、佛供のおろしも、いまだあるべき時節ならぬには、いかでかあらむと答ふる也。
- かりばかま——金葉集連歌に、かりばかまをば、をしとおもふかとあり。
- 佛の御弟子にさぶらへば——彼の老尼の乞食のみづからいふ也。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を四部の弟子といふ也。

三又后宮のきぬを編へる也

- 此の御そらたちのをしみ給ふ——前に、いかでまだきにはと、法師どものいひし事也。
- うちくむじたる——源氏物語に所々ある詞也。屈の字也。又燕の心ある所もあり。こゝはうち埋れて、花々しからぬ心なれば屈也。
- それがさぶらはねばこそ、とり申し侍れ——こと食物なき故こそ、佛供をたべとは、機嫌をとり申し上げたれと也。
- をかしき事、そへごと——かたはらいたき事、又とはすがたりに語りそへなどると也。
- よるはたれとねむ——尼がうたふ歌也。
- などかくかたはらいたき事はせさせつる——何とてかやうのうたを、うたはせしぞと也。后宮の仰せ事也。
- 常陸の介とつけたり——彼のうたひし詞につけて、尼が名につけたる也。
- いづちやりにけむ——后宮のとらさせ給ひしきぬは、いづくへやりしやらむと也。
- 小兵衛といふ人——后宮の御かたの若き女房也、奥に五せちの時あかひものとけしも此の人也。
- あれいかで見侍らむ——かれをいかでか見給はむと也。



一 葺山（葺山）のやう  
につみおきしに  
二 葺山（葺山）のやう  
し上伊たるにや  
三 葺山（葺山）のやう  
四 葺山（葺山）のやう  
五 葺山（葺山）のやう  
六 葺山（葺山）のやう  
七 葺山（葺山）のやう  
八 葺山（葺山）のやう  
九 葺山（葺山）のやう  
十 葺山（葺山）のやう

○御とくいななり、さらによもかたらひとらじ——其の尼は、后宮の御得意成りけり。此の方に見せさせ給ふとも、此の方へはかたらひとり侍らじと、内侍のざれていへる詞也。

○ふしをがむはされどよし——かたはなる尼なれど、其のさまはよかりしと也。

○其ののちいと久しく——常陸のすけかのかたはの尼に、物かづけさせ給ふを見て、ふすべ心にて久しくまいらざるなるべし。をこがましき事をいはむとて也。

さて、しはすの十餘日の程に、雪いと高う降りたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多くおくを、「おなじくは、庭にまことの山を作らせ侍らむ」とて、侍召して、「仰言にて」と云へば、集まりて作るに、主殿司の人にて、御きよめに参りたるなども、皆よりて、いと高く作りなす。宮づかさなど参り集まりて、言加へことに作れば、所の衆三四人参りたる。主殿司の人も、二十人ばかりになりけり。里なる侍召しにつかはしなどす。「今日此の山作る人には、祿賜はすべし。雪山に参らざらむ人には、同じからずとどめむ」など云へば、聞き付けたるは感ひ参るもあり。里邊きはえ告げやらす。作りはてつれば、宮づかさ召して、精二のひとらせて、縁に投げ出づるを、一つづつ取りに寄りて、拜がみつつ縁にさして、皆

一 葺山（葺山）のやう  
につみおきしに  
二 葺山（葺山）のやう  
し上伊たるにや  
三 葺山（葺山）のやう  
四 葺山（葺山）のやう  
五 葺山（葺山）のやう  
六 葺山（葺山）のやう  
七 葺山（葺山）のやう  
八 葺山（葺山）のやう  
九 葺山（葺山）のやう  
十 葺山（葺山）のやう

まかてぬ。抱など着たるは、かたへさらで、袴衣にてぞある。「これいつまでありなむ」と、人々の給はするに、「十餘日はありなむ」など、ただ此の頃の程を、ある限申せば、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日までさぶらひなむ」と申すを、御前にも、えさはあらじとおぼすめり。女房などはすべて、「年の内、つこもりまでもあらじ」とのみ申すに、餘り遠くも申してけるかな、げにえしもさはあらざらむ、朔日など申すべかりけると、下には思へど、さはれさまでなくといひ初めてむ事はとて、かたうあらがひつ。

○おほせ事にて——后宮の仰せといふにて、侍めして山作れと云ふ也。

○御きよめにまゐり——主殿寮は、御殿の酒掃をつとむる官人也。拾遺に、「とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな。」

○宮づかさなど——皇后宮職の大夫、亮、大進、少進、屬などを皆宮づかさといふ也。

○所のしう——藏人所衆とて廿人あり。六位の侍可然輩補之と職原抄にあり。禁秘抄にも委し。又禁秘抄、雪山の所の略云、所衆作レ山、瀧口上藤三人、所衆三人立レ庭奉行、持二柄振云々。これは禁庭の事ながら、后宮の雪山つくるもなぞらへてしるべし。

○おなじからずとどめむ——雪山作りたる人とは同じからずして、祿をとどめ

一十二月廿日也  
 二長也、雪山の高さは少しもさる也  
 三忠隆をおかむためなり  
 四忠隆が詞  
 五空前装ださいふこおなじ  
 六清少の詞  
 七忠隆が歌を感ずるさま也  
 八たまたか詞  
 九助字也、此の歌をかたらむと書立つべきし

てつかはすまじきと也。  
 ○こしにさして皆まかでぬ——巻網なれば腰にさす也。源氏物語に、こしざしとある是なり。  
 ○うへのきぬなどきたるは、かたへさらで、かり衣にて——祿賜はりて、人々退出してのち、袍きたる人の、かつ残り居たるは、狩衣に着かへて候ふなるべし。かたへさらでとは、源氏物語に、かたへはのこりてとあるたぐひ也。少少残りある心也。

二十日の程に、雨など降れど、消ゆべくもなし。たけぞ少し劣りもてゆく、「白山の観音」これ消やさせ給ふな」と祈るも物ぐるほし。さてその山作りたる日、式部の丞忠隆、御使にて参りたれば、しとねさし出だし、物などいふに、「今日の雪山作らせ給はぬ所なむなき。御前の壺にも作らせ給へり。春宮、弘徽殿にも作らせ給へり、京極殿にも作らせ給へり」など云へば、  
 こゝにのみめづらしと見る雪の山所々に降りけるかな  
 と傍なる人していはすれば、度々かたぶきて、「返しはえ仕うまつりけがさじ。あざれたり、御簾の前にて、人々を語り侍らむ」とてたちばき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらむ」とぞ給はする。晴かたに、少し小くなるやうなれど、猶いと高くてあるに、晝つか

はにいふ也  
 二出陣歌をすゝさきまじし也  
 二后宮也  
 三十二月晦日也  
 三是又かの雪山の事也  
 四枝の乞食の尼也  
 五尼が詞也、何かのたまふも也  
 六歌は言を永くすといへる心也  
 七常陸介がうた也  
 八嫉妬の心をにくむ也  
 九常陸のすけ手をうしなひて也  
 十かゝりありく也  
 十一運奉の詞也  
 十二手をうしなひて雪山にかゝづらひしはあはれなる也也  
 十三雪山也  
 十四雪をえやうで包

た、縁に人々出て居などしたるに、常陸の介出て来たり。「などいと久しく見えざりつる」と云へば、「なにか。いと心憂き事の侍りしかば」と云ふに、「いかに。何事ぞ」と問ふに、「猶かく思ひ侍りしなり」とて、長やかに詠み出づ。  
 「うらやまし足も引かれずわたつうみのいかなるあまに物賜ふらむ  
 となむ思ひ侍りし」と云ふを、にくみ笑ひて、人の目も見入れねば、雪の山に登り、かゝづらひありきていぬる後に、右近の内侍に、「かくなむ」と云ひやりたれば、  
 「などか人添へて、こゝには賜はせざりし。彼かはしたなくて、雪の山までかゝり傳ひけむこそ、いとかなしけれ」とあるを、又笑ふ。雪山はつれなくて、年もかへりぬ。

○しら山のくわんおん——加賀の白山は、いつも雪消えぬ所なれば、念じたるにや。古今、消え果つる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞありける。  
 白山明神は延喜式神名帳には、加賀國石川郡比咩神とあるを、泰澄法師には十  
 一面観音とま見え給へり。其の本地を、しら山の観音といへるなるべし。  
 ○式部のぞうただたか——前の翁丸をうちたる藏人忠隆同人なるべし、寛弘元年正月式部丞に任ずる由、勅物にあり。  
 ○御前のつばにも——一條院の御前也。禁秘抄、雪山の所に云、事始、大略一條院御時以後也。清少納言記有「其子綱」云々。この所の事なるべし。

○春宮——三條院也、冷泉院第二皇子、寛和二年七月十六日春宮に立たせ給へり。  
○弘徽殿——義子也。榮花物語系圖云、義子一條院弘徽殿女御、兩院太政大臣公季公女。

○京極殿——道長公なるべし。拾芥云、京極殿土御門南、京極西、南北二町、其南一町被入道長家。

○こゝにのみめづらしと——歌、此の后宮の御方にのみと思ひしに、さやうにあまた所にもふれわたりにしよとの心を、雪のふるにそへたる歌也。

○あざれたり——左禮の義也、これにかくて侍る事實義ならずと、卑下の詞也。返歌えせねば退出せむとていへるなるべし。

○いみじくよくとぞ思ひつらむ——至りてよく返歌せむ、さなくば一向すまじきと、忠隆がおもひつらむと也。

○いと心うき事の侍りしかば——彼のかたはの尼に、衣とらせ給ふが、心うきにうらみてまいらざりしと也。

○うらやましあしもひかれず——足もえひかぬほど、物とらせ給ふといふに、尼が足ひく事をいふ也。

○かくなむといひやり——かやうくにて目も見いれず、ひたちのすけをいなせたると也。

○などか人そへて、こゝにはたまはせざりし——甚のひたちの介に人そへて、右近がもとへもおこせ給はれかしとの心也。

朔日の日又雪多く降りたるを、驚くも降り積みたるかなと思ふに、これはあひなし。はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。上にて、局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、袖の葉の如くなる宿居衣の袖の上に、青き紙の松につけたるをおきて、おなまき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」と云ふに、ふとめてたく覺えて、取りて参りぬ。まだおほとのごもりたれば、母屋にあたりたる御格すおこなはむなど、かき寄せて、一人念じてあぐる、いと重し。片つ方なればひしめくに、おどろかせ給ひて、「なごさはする」との給はすれば、「齋院より御文の候はむには、いかでか急ぎあげ侍らざらむ」と申すに、「ナにいと疾かりけり」とて、起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯糖二つを、卯杖のさまに、頭包みなどして、山橋、日蔭、山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし。ただなるやうあらむやはとて御覽すれば、卯杖の頭包みたる小き紙に、

一 漢少の心  
二 后宮の御詞也  
終にふりし雪は  
あぢきなし也  
三 是より、又齋院より御覽有りし御がたり也  
四 齋院の御使也  
五 袖葉にやうすき直衣なるべし  
六 文也  
七 さむけなるさま也  
八 漢少の心也  
九 また后宮御詞なりし也  
一〇 卯杖也、又本願也  
一一 御格子あけなさま也  
一二 おしなべての心也  
一三 齋院御覽し

山とよむ斧の響を尋ねれば祝の杖の音にぞありける。御返し書かせ給ふ程も、いとめてたし。齋院には、これより聞えさせ給ふ。御返し

一、いかにてさやうには急ぎひしめくぞ也  
 二、清少のこたへ也  
 三、后宮の詞也  
 四、七言言はなかりし也  
 五、只是はかりにてはあらじ也  
 六、斎院御歌  
 七、此の御音信を始にて、此ののちより申し通はし給ふ也  
 八、音なきはしなごし給ふなるべし、執し給ふさま也  
 九、斎院の御使におくらるる也  
 十、正月のきねの色也  
 十一、白きに赤きかはえあへるさま也  
 十二、使のろくなか

も、猶心ことに書き汚し、多く御用意見えたる。御使に、白き御物の單衣、藤袴なるは梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かつきて参るもをかしう見ゆ。此の度の御返事を、知らずなりにしこそ口惜しかりしか。

○ついたちの日——勘物云、長徳元年正月一日乙卯雪降。  
 ○うへにてつぼねへいととう——后宮の御方にて、清少の局へ早朝におりしに也。

○さぶらひのおきなるもの——侍の長也。年勞ある心なるべし。帯刀長などいふ心にや。

○わななき出でたり——是奉らむなどふるひく、いふさま也。寒けなるさまなるべし。

○齋院より——選子内親王也、村上天皇皇女、紹運録云、號大齋院、歴五代。也足軒御説云、選子を大齋院と申すは、圓融院より後一條院まで、五代の齋院たるによりて也。

○ひとりねむじてあぐる——清少ひとりしては、あげがたきをこらへ念じてあぐる也。

○げにいととかりけり——清少のいかでかいそぎ侍らざらむといふゆゑ、まことに早きあげやうぞやとの給ふにや。

いきたる也  
 三、后宮の御歌  
 七、執し給ふさま  
 七、使のろくなか

一、雪の日の数、こりしさま也  
 二、後の年の内陸日までもあらじとのみ申せし人  
 三、心ちするさま也  
 四、清少の心也  
 五、人々の心也  
 六、正月三日也、后宮の参内し給ふ也  
 七、眞實に也  
 八、后宮也  
 九、清少の心也

○うづち二つを、うづちの——卯杖、卯杖昔前に註す。江次第二小書曰、漢宮儀云、正月卯日以三桃杖一作三剛卯杖一應鬼云々。  
 ○山とよむをのの——歌、山とよむは山にひびく心也。「山下とよみゆく水の」と古今によみし詞也。山中ひびきて、斧の音かると尋ねみれば、此の祝杖をつく音ぞと也。卯杖を祝杖といふ事前に註す。

○すはらなるは梅なめり——赤く見ゆるは梅の衣也と也。桃華御説に、梅表裏蘇芳。十二月より正月に至る云々。

雪の山は、まことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。黒くなりて、見るかひもなき嶽ぞしたる。勝ちぬる心地して、いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど、「七日をだにえ過ぐさじ」と猶云へば、いかでこれ見はてむと、皆人思ふ程に、俄に三日内へ入らせ給ふべし。いみじう口惜しく、此の山のはてを知らずなりなむ事と、まめやかに思ふ程に、人も、「げにゆかしがりつるものを」など云ふ。御前にも、仰せらる。同じくは云ひあてて、御覽せさせむと思へるかひなければ、御物の具運び、いみじう騒がしきにあはせて、木守といふ者の、築土の程に願さして居たるを、縁のもと近く呼びよせて、「此の雪の山いみじく守りて、童などに踏み散させ毀たせて、十五日までさぶらはせ。よくく守りて、其の日にあたれば、めでたき縁賜はせむとす。私にも、いみじきうこびいはむ」など語ひて、常に縁殿所

八十五日までいひし事也  
 入内の道具也  
 二〇さしあはせて也  
 二願さしかけて也  
 三清少の木守にいひつくる詞也  
 三十五日になりたらは也  
 四下すなごのくも、所の菓子也  
 五木守がよろこびて也  
 六清少のこさは也  
 七此のわがいふ子細をいへ也  
 八后宮の入内也  
 九清少も禁中に待りて、さて里へ出でし也  
 十禁中の奉公人也  
 十一是らをつかはして也  
 十二木守がさまじ也

の人、下衆などに乞ひて、くるるくだ物や何やと、いと多く取らせられたれば、うち笑みて、「いとやすき事、たしかに守り侍らむ。蓋などぞ登り侍らむ」と云へば、「それれを制して聞かざらむ者は、事の由を申せ」など云ひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出でぬ。其の程も、これがうしろめたきまゝに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどを遣りたれば、三三三みつる事など、歸りては笑ひあへり。

○雪の山は、まことにこしのにやあらむ。きえげもなし——前にしら山の観音これきやさせ給ふなど、いひし首尾也。彼の本歌に、「消え果つる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞありける」とよみしごとく、越路の雪やらむ消ゆる氣もなしと也。

○にはかに三日うちへ——勘物云、入内事無二所見二若密儀歟云々。

○人もげにゆかしがりつる物をなど——清少のみならず人々も、此の雪山のはてゆかしがりし物をと也。

○こもりといふもの——木守、山守とてあり。御庭木など守る物なるべし。

○めでたきろく賜はせむ——后宮の侍殿あらむと也。たばかりていへるにや。次に私にもとは清少の也。

○だいはん所の人、げすなどにこひて——蓋簾所はいまの源所也。菓子何角と

言すまし、さまじめな言り來てわらふ也

一夜聞ると其のま、也  
 一雨目をまたでさめらむ事よ也  
 二下女かへりて告ぐる詞也  
 三木守がいひし詞を下女がたたる也  
 四やくそくの祿をあらはす也  
 五清少の心也  
 六早く也  
 七八旬  
 八十五日のあそ

乞ひとりて木守にとらせたる也。

○其のほどにもこれがうへうしろめたきまゝに——清少禁中に七日まで候ふほど、此の雪山の事心もとなかりしと也。

○すましをさめ——すましは、須磨の巻に、ひすましとある物にや。細流いやしき女也云々。孟津抄下女也。最下の物也云々。をさめは、八雲抄下女也云々。須磨の巻にをさめみかはやうと有り。禁秘抄、長目御厨人と書けり。

里にても、あくるすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、「五六尺ばかりあり」と云へば、嬉しく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむと、いみじくうちをし。今日もまちつけてと、よるも起き居てなげけば、聞く人も物ぐるほしと笑ふ。人の起きて行くに、やがて起きて、下衆おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きてたるを遣りて見すれば、「わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこら、わらはべも寄せて守りて、明日あさまでさぶらひぬべし。祿賜はらむ」と申すと云へば、いみじく嬉しく、いつしか明日ならば、いと疾う歌よみて、物に入れて参らせむと思ふも、いと心もとならわびしう。まだくらきに、大きな折檻などもたせて、「之に白からむ所、ひたもの入れてもて來。きたなげならむはかき棄てて」など、云ひくゝめて遣りたれば、いと疾く、もたせてやりつる物ひきさげて、「はやら失せ侍りにけり」

- 一 清少の事也
- 二 持て来れ也
- 三 下女の詞也
- 四 雲山はなかり
- 五 清少の心也
- 六 清少の心也
- 七 清少の心也
- 八 清少の心也
- 九 清少の心也
- 十 清少の心也
- 十一 清少の心也
- 十二 清少の心也
- 十三 清少の心也
- 十四 清少の心也
- 十五 清少の心也
- 十六 清少の心也
- 十七 清少の心也
- 十八 清少の心也
- 十九 清少の心也
- 二十 清少の心也

と云ふに、いとあさまし。をかしようみ出でて、人にも語り傳へさせむと、うめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならむ。昨日さばかりありけむ物を、夜のほどに消えぬらむ事」と云ひ願すれば、「木守が申しつるは、昨日日いと暗なるまで侍りき。藤を賜はらむと思ひつるものを、賜はらざる事」と、手をうちて申し侍りつる」と云ひ願ぐに、内より仰言ありて、「扱て雪は今日までありつや」との給はせられたれば、いとねたく口をしけれど、「年のうち朔日までにあらじ」と、人々啓し給ひし。昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなむ思ひ給ふる。今日までは、あまりの事になむ。夜のほどに、人のにくがりて、取り棄て侍るにやとなむ推しはかり侍る」と啓せさせ給へ」と聞えさせつ。

- 七日の御節供のおろし——正月七日七種の御粥をたてまつる事也。前註。こ
- こは后宮の御膳のすべり。をさめ、すましなどにもたせて木守がかたへやる也。
- 人のおきてゆくにやがて——十四日の朝也。人のおき出でたこにいひつけて下女をおこさする也。
- わらふだばかり——いせ物語に、わらふだのおほきさしてとあり。圓座也といへり。彼の雪のえんざほどにてのこりしと也。
- をりびつ——折櫃也、桐壺巻をりびつ物、こものとあるを、をりうづ物と

よむ也。

- もたせてやりつる物——彼のをりびつなど引きさげてかへりたる也。
- いひくむざれば——云 扇也。昨日までありし雪の、夜の程にきえぬらむ事、まことしからずといひつめたる心也。理窟にいひつめし心なるべし。
- きのふの夕ぐれまで侍りしをいとかしこしと——十四日まで侍りしは賢く申しあてたると思ふと、まけず口に申す詞也。

さて二十日に参りたるにも、まづ此の事を、御前にてもいふ。皆消えつとて、蓋のかぎりひきさげてもて来りつる、ぼろしのやうにて、すなはちまうで来りつるが、あさましかりし事、物の蓋に、小山うつくしう作りて、白き紙に、歌いみじく書きて、参らせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひける事を、たがへたれば罪得らむ。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて、取り棄てさせしぞ。かへり事に、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出てきて、いみじう手をすりていひけれど、「仰言ぞ。かのよきならむ人に、かうきかすな。さらば屋うちこぼたせむ」といひて、左近のつかさ、南の築土の外に皆取り棄てし。いと高くて、多くなむありつ」と云ふなりしかば、げに二十日まで待ちつけて、ようせずば、今年の初雪にも降り添ひなまし。うへにも聞き召して、「いと思ひよりがたくあらがひたり」と、殿上人などにも

- 一 后宮へ清少の
- 二 取る也
- 三 取りにやりし
- 四 物の事也
- 五 三をりびつのお
- 六 たはかり也
- 七 彼の雪に歌を
- 八 へてまららむ
- 九 さおもひし事を
- 十 かたる也
- 十一 雪のいろをか
- 十二 たぐる也
- 十三 后宮の御詞也
- 十四 七十四日の事也
- 十五 八人のにくみて
- 十六 どり捨て侍るに
- 十七 もやま、清少の
- 十八 返事にいひし事
- 十九 也

九后宮の御意に  
 取りすつるぞ  
 也  
 一〇こり捨てたる  
 さいふなご也  
 二層也  
 三木守が家をこ  
 ぼたせはらばむ  
 也  
 三イの人  
 四外也  
 一五句  
 六わろくしたら  
 ば也  
 七久しくきえぬ  
 事をの給ふ詞也  
 八こり捨てたり  
 さいひあらはし  
 たらは清少の勝  
 ちたるも同然と  
 也  
 一五后宮也  
 二清少の詞也  
 三かくうき事を  
 承りて也也  
 三一後院も后宮  
 へおはして也  
 三勅言也

仰せられけり。さてもかの歌をかたれ。今はかくいひあらはしつれば、同じごと勝  
 ちたり。かたれ」など、御前にも給はせ、人々もの給へど、「何せむにか、さば  
 かりの事をうけ給はりながら啓し侍らむ」など、まめやかにうく、心うがれば、う  
 へも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは、多くの人なめりと見つるを、これにぞあ  
 やしく思ひし」など仰せらるゝに、「いとどつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。  
 「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。後に降り積みたりし雪を、うれしと思ひし  
 を、それはあいなし」とて、「かき捨てよ」など仰言侍りしか」と申せば、「げに勝たせ  
 じとおぼしけるならむ」と、うへも笑はせおはします。

○ぼうしのやうにて——帽子にや、物のふたをいただきてかへりたるさまなる  
 べし。  
 ○から心に入れて思ひける事をたがへたればつみうらむ——清少のかほど用意  
 したる事を、たがへ給ひて隠し果て給はば來世の罪やうべきと也。彼の雪山の  
 なくなりしは后宮の取りすてさせ給ひしとかたりあらはさせ給ふ詞也。  
 ○そのおきないできて——彼の雪とリ捨つる時、木守が詫びたるよしを侍共の  
 申し上げたる事を、かたらせ給ふ也。  
 ○かのよりきたらむ人に——清少のたのみおきしをさしていふ也。  
 ○さらば、やうちこぼたせむ——此の事を清少に告げたらば、このついでに願

一清少の心也  
 二清少の詞也  
 三正月一日の雪  
 の事也  
 三勅言也

しだる家をこぼたせむぞと也。  
 ○左近のつかさ南のついでちのち——左近の官人雪を捨てたる也。イ本左近の  
 つかさの南のついでち、左近の陣の南の築地の外へ雪を捨てたる也。  
 ○うへもきこしめして——一條院も、此の清少の雪山をつよくいひし事をきこ  
 しめしけると、后宮のかたらせ給ふ也。  
 ○おほくの人なめりと見つるを——年頃は大體の人と思し召しけるを、此の雪  
 の日数をいひあてたるに、奇特におぼしめすと也。  
 ○げにかたせじとおぼしけるならむ——まことにはじめより清少にかたすまじ  
 きと、后宮のおぼしけるならむと、主上の御詞也。

8252



昭和六年三月十七日  
昭和六年三月十五日  
昭和二年十月十五日

印刷第一刷發行  
印刷第十三刷發行

枕草子上卷  
定價參拾圓

校訂者

池田龜鑑

發行者

東京都千代田區錦田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者

東京都板橋區志村町五番地  
楠末治

發行所

東京都千代田區  
神田一ツ橋二ノ三

岩波書店  
會員番號A一〇九〇〇四號

配給元

東京都千代田區  
神田淡路町一ノ九

日本出版配給株式會社

凸版印刷・永井製本



24年 3月 4日 733

閱覽濟

終

